「人間としての成長」を求めて

しかし、最後に、もう一つの「リターン」を忘れてはなりません。

「目に見えない四つのリターン」。

その第四の「リターン」です。

それは何でしょうか？

「グロース・リターン」（成長報酬）です。

すなわち、「成長」（growth）というリターンです。

我々は、仕事を通じて成長していきます。

働くことの苦労や喜びを通じて、人間として成長していきます。

そして、この「人間としての成長」というものが、

知的プロフェッショナルにとって、

働くことの「究極のリターン」なのです。

なぜでしょうか？

「自分」というものが、「究極の作品」だからです。

知的プロフェッショナルにとっては、

「自分自身」が、「究極の作品」なのです。

では、「作品」とは何か？

それは、我々が、限りある人生の中で、仕事というものを通じて、

そして、働くことを通じて、心を込めて残していくものです。

そして、もし世の中に、「プロフェッショナルの条件」と呼ぶべきものがあるならば、
この「作品」という視点こそが、その条件なのです。

なぜならば、プロフェッショナルが、仕事というものを通じて生み出しているのは、
単なる「商品」ではないからです。

プロフェッショナルが、働くことを通じて生み出しているのは、
心を込めた「作品」なのです。

それはときに、建築物やファッションのような「形に残る作品」かもしれません。
それはときに、教育や介護のサービスのような「形に残らない作品」かもしれません。

しかし、いずれにしても、プロフェッショナルは、
自分が仕事を通じて生み出しているものを、
単なる「商品」とは思っていないのです。

プロフェッショナルは、
自分が働くことを通じて生み出しているものを、
かけがえのない「作品」であると思っているのです。

限りある人生の中で、心を込めて残していく「作品」であると考えているのです。

そして、もし我々が、プロフェッショナルとしての自覚を持ち、
仕事において、こうした「作品」という視点を深めていくと、
いつか、一つの「思想」に逢着します。

それが、冒頭に述べた「思想」です。

「自分自身」が、「究極の作品」である。

その「思想」です。

プロフェッショナルは、
数々の「作品」を生み出し続けていく自分自身が「究極の作品」であるという思想を、
いつか抱くようになっていくのです。

そして、もし、この思想を胸に抱くならば、
プロフェッショナルは、その人生における長き道のりを、
「自分という作品」を創り上げていくのだという矜持を持って歩み、
日々の仕事に取り組んでいくでしょう。

そして、「人間としての成長」をどこまでも求め続けることによって、
「自分という作品」を高め、磨き続けていくでしょう。

これが、「グロース・リターン」ということの、本当の意味です。

「人間としての成長こそが究極の報酬である」ということの、最も深い意味です。

「自然(じねん)の智恵」の世界に向かって

そして、この「グロース・リターン」が、
「ナレッジ」「リレーション」「ブランド」という
三つのリターンの好循環のサイクルに加わるとき、
知的プロフェッショナルにとっての「収穫逓増」の戦略は、
最も強力な段階を迎えるのです。

なぜでしょうか？

「パーソナリティ」こそが、最高の戦略だからです。

すなわち、「グロース・リターン」を求め続けることによって
人間としての成長を遂げていく知的プロフェッショナルは、
その成長の結果、優れた「パーソナリティ」を身につけていきます。

そして、優れたパーソナリティを身につけた知的プロフェッショナルの周りには、
自然に、多くの人々が集まり、多くの智恵が集まるだけでなく、
自然に、多くの機会が集まり、多くの仕事が集まってくるのです。

知的プロフェッショナルが、究極、めざすべきは、
まさにこうした世界に他なりません。

しかし、おそらく、そのとき、この知的プロフェッショナルの心の中には、
すでに「収穫逓増」の戦略もなく、「波乗り」の戦略思考もないでしょう。

そのとき、この知的プロフェッショナルが身につけているのは、
欧米的な思考のスタイルや戦略思考をはるかに超えた、
東洋思想に語られる「自然（じねん）の智恵」とでも呼ぶべきものなのでしょう。

いかなる企図も人為もなく、自然に物事が善き方向へと巡っていく。
そうした「自然（じねん）」の世界を現ずる、「深い智恵」を身につけているのでしょう。

我々ビジネスマンが、これからの永い歳月の歩みを通じて、
先達のプロフェッショナルから学ぶべきは、
究極、この「深い智恵」に他ならないのです。